



↑中央にあるクリーム色のビルの場所に、旧傳光院があつた  
とされる。左の白いビルの一階にサークルKがある。

## 料亭鳶茂 ご主人 深田正雄氏に聞いた、紫式部伝説

「江戸時代の傳光院の住職が伝説を作つて、紫川にはまつとつたかわからんよ」

↓料亭鳶茂 ご主人・深田正雄氏。「名古屋の旧町名を復活させる有志の会」の活動をしている。



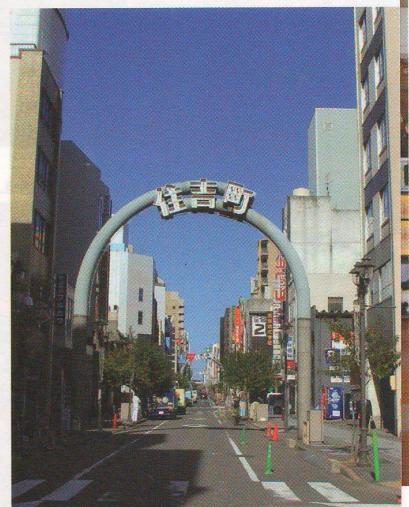
「今はりませんが、私は昭和二十六年頃、料亭鳶茂の南西にある白川幼稚園に通っていました。そこは傳光院敷地内で先代の吉田宣章住職が経営をされていたのです。三百坪くらいはあつたんじゃないかな。そう広くはありませんが、奥行きが長くて七十メートルくらいあつたと

思いますよ。当時はお寺ということを知らなかつたけど、泉があり水が湧いていたことは覚えています。紫式部の石碑があるということも聞いていましたが、すっかり忘れていて。

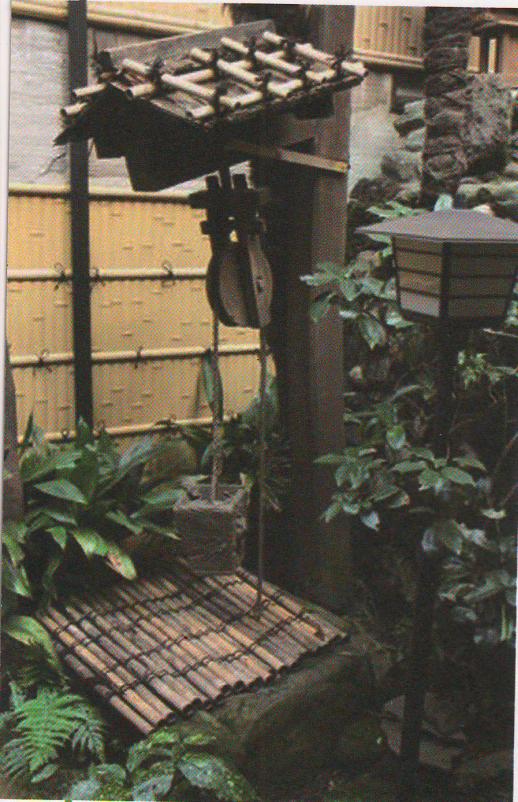
### 紫川にはまる、について

「紫川にはまる」とは、女遊びにはまる、という隠語ですよ。江戸時代後期、紫川の流れに沿つた大須西（現在は一丁目）には旭の廓があつてね。尾張藩主で名古屋の文化・経済を活性化させた徳川宗春が南寺町の周り三箇所に遊郭を作つた。しかし、宗春の治世後は三つの郭町の維持はなかなかできなかつたから、寺町西地域に集約させたようです。それが紫川のほとりにあつた旭の廓なのです。この遊郭へ遊びに行くことを紫川に行くと言つていたそうです。今でも、はまるつていうでしょ。女遊び

それで思い出したのが、中学生のとき。吉田住職が東海中学の教諭をされていて思い出したんですよ。でも、そのときはもう傳光院は移転した後だったので、確かめようがない。千種区猪高町に移つてからも石塔はあります。泉は跡地にマンションが建設されてなくなつてしまつたね」



↑住吉町のモニュメントがある通り。  
右奥に料亭鳶茂がある。



↑店の中にある井戸。元の水源は奥にあるが、現在では手前に移動している。



→旧傳光院跡地の入り口とされる場所。現在は、駐車場などなおり、細長い敷地だけが名残といえよう。



「料亭 蔦茂」外観。黒色の扉が落ち着いた雰囲気を醸し出す店内を流れる水の音に、自然と心は落ち着く。

びにはまる。だから「紫川にはまる」と言つたわけです。  
ただ、なぜ紫川と呼ぶのかはよくわからない。私はね、紫式部の伝説は誰かの創作だと思いますよ。不思議なことに江戸時代、尾張藩というは読み書きが非常に盛んで、識字率が非常に高かつたことは事実ですよ。それはなぜかというと、武家が職芸として寺子屋で町衆や職人衆に学問を教えていたからです。尾張藩は六十一万石といわれていますが、それは過少申告じゃないかと。祖父が語るには、新田開拓も多く実際は三百万石くらいあつたのじゃないかと言つていました。「加賀百万石」といいますけど、濃尾平野のほうが倍以上広いからね。豊かで文芸盛んで、平和な城下町ですね。町中の人は読み書きができる。お武家さんは教科書代わりに得意な「論語」を町衆に

## インタビューを終えて

名古屋の街には多くの歴史が眠っている。それを象徴するのが、旧町名の存在だ。深田氏は「名古屋の旧町名を復活させる有志の会」の会長をされている。名古屋は第二次世界大戦の空襲で崩壊し、くわえて町名も変わつてきている。名古屋に残っていたはずの歴史は少しずつ失われてゆく。歴史を紐解く手掛かりを消さないためにも、旧町名を復活させてもらいたいものだ。

太田啓介

### 所在地

料亭 蔦茂

住所: 愛知県名古屋市中区栄3-9-27  
地下鉄東山線栄駅 徒歩5分  
電話: 052-241-3666

読ませるんだよ。すると、みんな親孝行して徳が上がるでしょ。みんなね、悪いことしなくなつちやうわけ。それに、文字が読めたから、短歌や俳句を一般庶民が楽しんだ。歌でお互いの心を通わすわけだよ。平仮名の傳光院の住職さんが自分の寺子屋をはやらせる営業シンボルとして伝説を作つた。泉があつて、「紫式部に仕えていた官女が住んだ」という話をしたら繁盛するだろうと考えたかもしれない。町衆は源氏物語が好きだから、それを聞けばやつてくるでしょう。傳光院の住職が伝説を作つて、寺子屋が繁盛して、紫川にはまつたかも知れない。ただ、これはあくまで深田正雄説ですけどね」